

葡 萄 の 摘 心 試 験

大 崎 守*・横 尾 宗 敬*・河 瀬 憲 次*

ÔSAKI, M., YOKOI, M. and KAWASE, K.
Severe Pinch on Campbell Early Grape.

緒 言

葡萄の摘心について第1年目における軽摘心強摘心の果実に及ぼす影響を本誌昭和33年3月第20号に報告したが、第2年目の影響が明らかになつたので、ここに報告する。

実験材料及び方法

*九州農業試験場

今回は両区より各時期に果実30粒宛採取、前回は報告したと同様の要領で調査した。又種子の100粒重の調査をも行つた。

実 験 結 果

第2年目の果実及び果汁成分の時期的変化は第1図及び第2図に示される通りである。

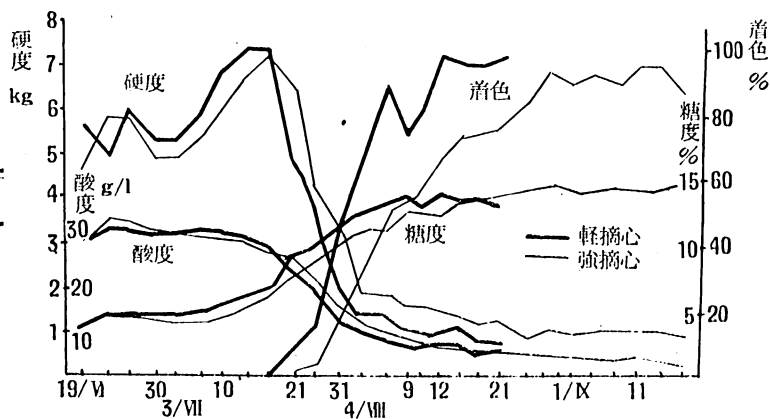
この回において果実の硬度、酸度、糖度、着色は前年同様の経過を示し特に変つたところはないが、粒重

が第1年目軽摘心区と強摘心区との間に差がなかつたのに反し、第2年目には明瞭な差が見られている事である。又本年は第1表に見られる如く

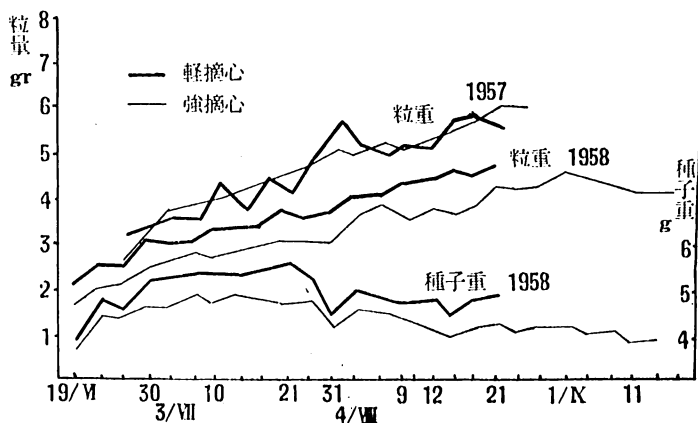
第1表 時期別収穫量 (gm)

処理		軽摘心	強摘心
8.	21	121,150	4,760
	22		
	23		4,640
	24		
	25		3,010
	26		
	27		9,990
	28		
	29		
	30		
	31		
9.	1	21,420	
	2		
	3	10,300	
	4		
	5	13,290	
	6		
	7		
	8	12,880	
	9		
	10	9,925	
	11		
	12		
	13		
	14		
	15	3,863	
	16		
	17		
	18	3,940	
総計		121,150	98,018

第1図 葡萄果実の時期的変化 (1958年)



第2図 葡萄果実の時期的変化



前年より強摘心区の収穫期の中が極端に広くなり、軽摘心区は齊に熟し1度に収穫も出来たのに反し強摘心区は8月21日から9月18日迄実に29日間にわたり少量あてしか熟さなかつた。その上果房に緑果粒が混じり着色悪く品質の悪いものであつた。収量においても第1年目強摘心区が多かつたのに対し第2年目は逆に軽摘心区の方が多くなつた。

第2表は収穫後9月24日結果枝を両区6本あて採取し解体調査したものである。1番枝の重量も軽摘心

区多く、2番枝重は強摘心区は摘心してあるので極端に少い。葉重は強摘心区は軽摘心区の約1/5しかない。その上強摘心区の葉は破れ痛み微量元素の欠乏症状が出たものが多いのである。

第3表は果房及び樹の状態の第1年目第2年目を纏めたもので、第1年目強摘心区は果房重量が重く結果枝も多く収量増加の成因となつたのに反し、第2年目は果房重量は軽摘心強摘心ほぼ同じで、結果枝数は前年弱少結果母枝の多かつた強摘心区が減少し収量減

第2表 1 結果枝枝葉重 1958年 9月24日 (gm)

項目	1番枝重	1番葉重	2番枝重	2番葉重	総枝重	総葉重
軽摘心区	40.2	30.5	58.7	119.2	98.9	149.7
強摘心区	27.7	18.8	7.9	13.0	35.9	31.7

少の因となつているのがわかる。樹体の方をみると結果枝基部の重量は両年共強摘心区の充実悪く少なくな

つている。剪定量は地下部の伸長量と考えてもよからうが、同様に強摘心区が少なくなつている。

第3表 果房及び樹の状態

区別	項目	年度別 処理	1957年		1958年	
			軽摘心区	強摘心区	軽摘心区	強摘心区
果房	総完全平均房果房平均重粒数	房平均重粒数	353房	407	533	466
			239.6gm	272.4	245.9	242.9
			—	—	13.9 cm	12.4
			—	—	54.5 個	61.9
樹体	総結果枝数 結果枝基部30cm重(100本) 主枝先端伸長量 剪定量	枝数 重(100本) 伸長量 量	321本	330	337	323
			2,054gm	1,950	2,313	2,020
			13.3 m	12.9	18.0	14.0
			15,638gm	12,589	27,738	14,099

結 論

普通側枝を摘え実止りをよくするために少量の摘心は必要であるが、必要以上に強い摘心が未だ行われている地方があるので、極端な例ではあるが本試験の如き強摘心の影響を調べてみた。強摘心は葉面積を減少させ、同化養分の不足から果実の成熟を遅らし又着色

も充分でなく、初年目は果穂及び果粒が一時的に長く太くなる等の事から収量が増加する傾向にあるが、2年目になると貯蔵養分が減少し穂長も短くなり果粒も小さくなつて収量の減少をみる様になる。又その熟期も極端に遅れ且長期にわたり収穫に困る様になる。従つて強度の摘心は満足な実もとれず樹を衰弱させ寿命を短かくするので行ふべきではないと思われる。